ベルクソンにおける〝画家の知覚〟について[1]

宮川　達

0　問題の所在

本論はベルクソン（H. Bergson, 1859-1941）が『変化の知覚』*La perception du changement*――『思考と動くもの』*La pensée et le mouvant*（一九三八）に所収――のなかで提示し、そして画家のそれがそうであるという〝自然が行動の能力に結びつけ忘れた[2]〟知覚の能力が、いったいいかなるものであるのかということの解明を試みる。ベルクソンの知覚概念については、すでに別稿「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について[3]」において検討を試みた。この別稿においては、純粋知覚からの広範な領域を持つ知覚を、概ね『物質と記憶』*Matière et mémoire*（一八九六）の展開にしたがって辿りながら、知覚の意義と知覚と記憶の関連についての検討をおこなった。本論はこれを踏まえての考察となる。

この〝自然が行動の能力に結びつけ忘れた〟知覚の能力、われわれが〝画家の知覚〟と呼ぶ知覚とは、われわれが前掲の別稿でみてきた〝われわれの知覚〟、われわれの通常の知覚とはまったく異質のものなのであろうか。まったく異質のものであれば、おそらくわれわれは、そのようなものをさし出されても、「そうだ！（真実だ！）elles sont

vrais」[4]とはいいえないであろう。ということは、つまり〝画家の知覚〟はけっしてわれわれの知覚とまったく異質というわけではないことになるだろう。それはまさに、その知覚が〝運動の能力と結びついていない〟という点にこそあるのだろう[5]が、しかし、これはいったいどういうことを意味しているのであろうか。このことを明らかにするために、さらに厳格に知覚の成立する範囲を確認しておくことにしよう。このようにして厳格に限界づけられた知覚の在り方こそが、まさに、〝画家の知覚〟の在り方を示しているとも考えられるからである。

1　意識的知覚——意識と知覚の関係

われわれは別稿「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」を通して、あくまでも〝理論上〟〝権利上 en droit〟想定された〝純粋知覚 la perception pure〟から出発し、それとの差異によって〝事実上 en fait〟の知覚を際だたせようとしてきた。純粋知覚が理論上のもの、権利上のものとされたのは、この純粋知覚には持続の厚みが、したがって記憶力が考慮に入れられていないからであったが、このような純粋知覚に対し、事実上の知覚をわれわれは〝意識的知覚 la perception consciente〟とも呼び分けてきた。たとえば「現前と表象というこのふたつのことばの差は、まさに物質そのものと、それについてわれわれがもつ意識的知覚の隔たりを表わしているように思われる[6]」といったようにである。つまり、われわれが問題にしている知覚とは、意識の関わる知覚であるということができるだろう。では、この意識とはなんなのか。明確にものごとを判断する、覚醒した心の状態をさすのであろうか。

われわれは、『物質と記憶』のなかから〝意識〟に関わる記述を確認することからはじめよう。「意識——この場合、外的知覚についての意識であるが——とは、まさしくこの選択を本質とするものなのだ[7]」、「なんの束縛なしに働くかのように現われるような、それ自体としての意識について、どんな観念を抱くにしても、身体的諸機能をなしとげている存在においては、意識が、なににもまして、行動を統括し、選択を明るく照らし出す役を受け持つということには、異論のはさみようはないだろう[8]」、「われわれが現在の現実についてもつ具体的な感情とは、じっさい、それによってわれわれの身体組織が、刺激に対して必然的に反

応するところの効果的運動について、われわれがもつ意識のことである[9]」――これらの引用の〝意識とは選択を本質〟〝意識が、なににもまして、行動を統括し、選択を明るく照らし出す役を受け持つ〟あるいは〝効果的運動について〟（傍点引用者）といった箇所に、われわれはまず、意識の特質を見て取ることになる。意識とは行動に関わるということ、しかし必然的、機械的な作用・反作用の運動における即座の反応そのものに関わるのではなく、それらを〝反省の対象〟として、それとの距離を持ち、あるいは作用の返し方を選択する余地――いままでわれわれがみてきたことばを思い起こせば、不確定性――とでもいうべきものに関わるということであろう。

このことを端的に述べる引用をもうひとつみておこう。「わたしがわたしの意識に、その意識が情緒においてわがものと主張する役割について尋ねれば、わたしの意識はこう答える。わたしが主導権をもっていると信じられるすべての運動過程においては、感情もしくは感覚のかたちでそこにあるが、反対に、わたしの活動が自動的になり、もはや意識はいらないと宣言するや、意識は姿を消し、消えてしまうのだ、と[10]。」この引用はさらに検討を要することになるが、われわれが、この引用に関して、いまここでとくに注目しておきたいのは、「（意識は）わたしが主導権をもっていると信じられるすべての運動過程においては、感情もしくは感覚のかたちでそこにある」（傍点及び（　）内引用者）という箇所にほかならない。意識とは、運動における主導権と不可分の関係にある。

しかし、われわれは、ここで整合性をつけておかなくてはならないことのあることに気づく。それは『物質と記憶』第3章で語られる、あまりにも有名な〝意識ある自動人形 un automate conscient〟[11]の譬えとの整合性の問題である。ここではまず「まったくもって純粋な現在のなかで生きるということ、刺激から引き続く直接的な反作用によって刺激に反応するということは、下等動物に固有なものである。このように処するひとは、衝動のひとだ[12]」といわれ、そしてそのようなひとのことをベルクソンは〝意識ある自動人形〟と呼ぶのである。つまり、運動には関わりながら、しかし、その運動に関して〝主導権〟をもちえない場合を語るにもかかわらず、それを〝意識的〟と呼んでいるということが矛盾であるように思われるということだ。

この問題を解決するのに、多少の寄り道をすることにす

る。

すると、この〝意識ある自動人形〟〝衝動のひと〟との対比において述べられるものとして、〝夢みるひと〟があげられる。そのひとは、「過去に生きる喜びのために過去に生きるひと、あるいは実際の状況にとってなんの利するところなく意識の光のもとへと記憶が浮かんでくるひとも、同じく行動に適していない[13]」ひとであった。〝行動に適していない〟、つまり現実の運動、行動と関わらないといわれるこのような夢みるひとのこと――あるいは、一般的に夢の状態――を、われわれはともすると無意識の状態であると思いがちだ。しかし他方では、思い出としてのさまざまな〝心象〟がたち上がるためには、その現実との関わり具合に程度の差こそあれ、それとしては無力な〝記憶の総体〟が、現実化されていなくてはならない[14]のだから、このような〝夢みるひと〟の場合も、〝無意識の状態〟であるともいえないはずだろう。つまり、一方では、われわれが考える〝無意識〟のようでもあり、行動に関わらないとされながら、しかし、他方では、それは意識的でなくてはならないという矛盾をわれわれはここでみることになるだろう。

この矛盾をわれわれはどう解決すべきなのだろうか。この問題についての、つまり夢と無意識に関連しての、直接の言及ではないが、ベルクソンは、つぎのようなことをもいうだろう。「観念論が知覚において、意識に思弁的役割を帰するからであり……[15]」あるいは「それゆえ、実在論が曖昧であるというのは、観念論のそれと同じく、わたしたちの意識的知覚や、意識的知覚の条件を、純粋認識の方へ向けて、行動の方へ向けないところから来る[16]」とも。ベルクソンがこれを述べる脈絡は、観念論、実在論への批判の箇所であり、ただちにこれをわれわれの脈絡にあてはめることはできないが、しかし、これらの批判から、われわれの一般的な理解と、ベルクソンのそれとのあいだに整合性をつけることの可能性を見いだすことはできるように思われる。ベルクソンはいう、「意識――この場合、外的知覚についての意識であるが――とは la conscience – dans le cas de la perception extérieure –[17]」と。

まさにこの限定、〝――〟によってなされるこの限定に整合性の根拠をみることができるのではないかと考えるのである。ベルクソンはけっして、〝思弁的な意識〟を否定しているのでもないし、また、〝行動の方へ〟ではなく

〝純粋認識の方へ〟向けられた意識を否定しているのでもない。意識にもさまざまな側面があると考えるべきなのだろう。〝思弁的な意識〟もあれば〝純粋認識に向かった意識〟、あるいはそのような意味での〝判明な〟あるいは〝覚醒した〟意識もあるというべきであって、われわれが、しばしば〝夢みるひと〟に欠けていると判断するのは、そのような意味での意識だろう。しかし、そのような側面での意識ではない意識が〝夢みるひと〟にはある。そのように考えることは可能だろう。この考え方を〝意識ある自動人形〟の問題に応用してみよう。[18]

すると、われわれはこのようにいうことができるだろう。〝意識ある自動人形〟にも、意識はある。しかし、その意識は、ベルクソンがここでいわんとする意識、「――この場合、外的知覚についての意識であるが――」と限定をする意識ではない。〝意識ある自動人形〟というときの〝意識〟とは、われわれが明らかにしようとする意識なのではなく、あるいはそれをうちに含むにせよ、しかし、それに限定されないもっとも広義の意味での意識、あるいは、われわれが漠然と通念的に――しかし、もう一方の通念、つまり思弁的な意識というのとはまったく対をなすものだが――思い描く意識のことをいうのだ、と。

われわれはl'imageという『物質と記憶』においておそらくもっとも肝心な概念でさえも、一般的な用法と、ベルクソンに固有の用法とのあいだで揺れ動いていることを、これも前掲の別稿で、すでにみている。[19] もちろん、その際のふたつの用法のあいだに矛盾があるというのではなく、また、意味するものが大きく乖離しているというのではなかった。l'imageの場合は、一般的な用法はベルクソンの用法に含まれ、そしてベルクソンのいうl'imageの、ある側面、あるアスペクトを際だたせていたといってよいが、ここでは、それと逆の事態が起こっているのだ。つまり、一般的用法における意識（漠然と、われわれが人間のことを意識ある存在だと考えるときに用いるような通念的な意味での意識）のうちのあるアスペクト、あるいはその一般的な用法のうちでも、さらにとりわけ観念論や実在論の人々が用いるような意味でのアスペクト（思弁的、あるいは明晰判明な意識）とは、べつのアスペクトを際だたせているのが、おそらく、ここで語られる意識なのである。[20]

ここで際だたせられ、われわれが明確にせねばならない意識とは、繰り返し示してきたように、〝外的知覚につい

ての意識〟にほかならない。そしてこの意識とは、行動との関係においてあり、しかも受け取った作用に対する反作用を留保するということ、そして同時に、その本来返すべき作用を対象化し、たち現わせるということに関わるということができるだろう。行動に関わりつつ、しかし、その行動が実際には現実化されていない状態、潜在的 virtuel である状態こそが意識ある状態だというべきだろう。〟意識ある自動人形〟という譬えとの整合性を以上のようにつけた上で、もう一度、先の引用、「わたしがわたしの意識に、その意識が情緒においてわがものと主張する役割について尋ねれば、わたしの意識はこう答える。わたしが主導権をもっていると信じられるすべての運動過程においては、感情もしくは感覚のかたちでそこにあるが、反対に、わたしの活動が自動的になり、もはや意識はいらないと宣言するや、意識は姿を消し、消えてしまうのだ、と」[21]を確認しておこう。

ところでベルクソンは、有名な逆円錐の図式[22]によって、記憶の総体と現実との結びつきを説明する。頂点を下に描かれた逆円錐が記憶の総体である。そしてこの逆円錐は、その頂点をある平面――この平面は、運動の平面である――に接しており、この頂点が、まさに現実的な運動がなされている点、過去が未来を浸食するその先端の点である。他方、この逆円錐の底辺は純粋記憶の状態である。ここにある記憶は、記憶心象とはなっていない〟無力なまま〟[23]の記憶である。ベルクソンはこのような逆円錐の図式を提示する。

さて、この図式において、この頂点から底辺への距離は、その過去の時間的な遠近を示すものではない。現実との関わりの度合を表わすものである。そしてベルクソンは、この現実との関係の度合、まさにその関係性にこそ意識をみているのではないだろうか。残念ながら、そのように明言しているところは見当たらないが、たとえば「再認は、純粋な記憶力のうちに純粋記憶を探しにいって、それらを現在の知覚に接触させるところまで、徐々に物質化しようとする意識の、多かれ少なかれ高度な緊張を含んでいる」[24]なり、あるいは「意識が、それによって、その内容の展開を引き締めたり広げたりする収縮と拡張の二重の運動」[25]といった引用が物語るのは、意識が伸縮ないし緊張を特性としているということであり、また、「もし意識が〟現在〟の、つまり現実に生きられるもの、さらにいえば

〝行動するもの〟の特徴にすぎないとしても、行動しないものは、なにがしかの方法によって、存在することを必然的にやめることなく、意識に属することをやめることができるかもしれない。別のいい方をすれば、心理的な領域において、意識は存在の同義語ではなくて、たんに現実の行動、あるいは直接的な有効性の同義語にすぎないであろうし……」[26]が意味するところも、意識が、なにかそのようなものとしてあるというのではなく、ある関係性、つまりは現実に対する可能性の緊張の尺度としてあるということをいっているとは読めないだろうか。

いま引用したばかりのところは、さらに「……このことばの外延がかくして限定されれば、無意識な心理状態、つまり、無力なものとしてのそれを考えることは、それほどむずかしいことではないだろう」[27]と続けられるのだが、このことは、純粋記憶ばかりを考えれば、それは現実との関係性がない、現実に対してまったくもって〝無力〟であるのだから、はなから〝可能的・潜勢的〟ではなく、それゆえ、それを意識がない状態として考えることができるということを意味しているといえる。他方、ある行動が現実になされること、それは、すでに〝可能的・潜勢的〟ではないということにほかならないのだから、ここでもまた、意識はないということになるだろう。先にも再三みた引用の「反対に、わたしの活動が自動的になり、もはや意識はいらないと宣言するや、意識は姿を消し、消えてしまう」[28]の意味するところがあらためて確認されることになるだろう。意識は、逆円錐の比喩のその頂点と底辺とのあいだ、これらの頂点と底辺を含まない限りでの範囲にたち現われる可能性そのものであり、この二項の関係を示す関係性にほかならないのだ。

この二項を結びつける関係性、その関係性の収縮の度合、緊張の度合を示すものこそが意識である。ベルクソンが逆円錐の図式を用いたのは、このことを説明するのにまことに好都合であったように思われる。

われわれは、この逆円錐の頂点と底辺を結ぶ関係性を意識とみた。ベルクソンは、この逆円錐の頂点と底辺を結ぶ線に垂直に交わる平面、あるいはこの逆円錐を輪切りにするその断面を意識の内容を示す平面と考えている。この平面は底辺に近いところにあっては底辺とほぼ同じ面積を占めるだろうし、反対に頂点に近づくにつれ、点に近い面積しかもたないものになってゆくことになるだろう。つま

り、意識が現実に近づけば近づくほど、したがって、この関係が緊張してくればしてくるほど、意識の平面の面積は小さくなってゆく。しかし、その内容については、面積に応じてまた少なくなってゆくと考えるのではなく、密度が凝縮されてゆくと考えるのである。[29] それがまさに「意識の、多かれ少なかれ高度な緊張」[30]なり、あるいは「意識が、それによって、その内容の展開を引き締めたり広げたりする収縮と拡張の二重の運動」[31]といわれるところである。

すでに明らかなように、この凝縮されてゆくもの、内容とは記憶心象である。純粋記憶の状態にあって、無力のままであった記憶が、現実との関係をもつことにより記憶心象に転ずる。しかし、まだ現実との関係が緊張の度合を高めていない状態、ちょうど夢みる状態にある意識の平面にあっては、この個々の記憶心象が星雲のごとくちりばめられているだけにすぎない。現実との関係の緊張が高まる、すなわち、意識の平面が逆円錐の頂点にむかってゆき、その意識の平面が小さくなってゆけばゆくほど、このちりばめられていた記憶心象は凝縮され、密度の濃いものへと転じてゆくだろう。ひとつひとつの記憶心象の個別性を失い凝縮したひとつの心象、つまり知覚心象がここにたち現われ、「判明な、再認された知覚 la perception distincte et reconnue」[32]、再認 la reconnaissance としての知覚が成立する。しかし、さらに現実との関係が進み、まさに意識の平面が逆円錐の頂点と一致するとき、すでに、この平面は面積を持たない、つまり平面たりえず、したがって意識でもなくなり、またそこにいかなる心象、知覚心象もありえないということになるのである。

意識とは、現実の行動に対する可能性である。そして、この意識のたち現われる限りにあってのみ、再認としての知覚もまた成立するのである。

2　意識的再認におけるもうひとつの認識・概念的把握と知覚

ここまででわれわれは、意識的であるときにのみ、知覚が成立することをみた。しかし、意識的であり再認としての知覚が成立しながら、なお『変化の知覚』のなかで、われわれのいう〝画家の知覚〟と対比させられ、批判されるような再認の形態があることをわれわれは見ておかなくて

はならない。それは、概念的把握によるものごとの認識である。『変化の知覚』における「われわれは対象をほとんどみていないのです、われわれは、ただそれがどんな範疇に属するのかさえしればじゅうぶんなのです」[33]との指摘が、まさに概念的把握に対する批判をしめしている。このような概念的把握、ものごとの表面的把握に満足せず、ものごとそっくりそのままを受け止めよというのがベルクソンのいわんとするところであり、そのようにしているものの典型例として画家の知覚があげられるのである。

ところで、この概念的把握への批判は、ベルクソンの根本的立場[34]であり、彼の著作のいたるところに、またさまざまな観点からの指摘として、それをみることができるが、ここでは、『笑い』*Le rire*（一九〇〇）のなかから「人間にとって無用の差異は消去させられ、人間にとって有用な類似性が強調される」[35]という引用をみておくことにしよう。ここで、あえて――『物質と記憶』からでも『変化の知覚』からでもなく――『笑い』から、この引用をしたのは、それらの批判のなかでも〝類似性〟という点に注目しつつ、概念的把握との差異を際だたせ、考察してみたいからである。

まず、われわれは、もう一度、再認としての知覚、そのときたち現われる知覚心象がどのように成立するのか確認しておこう。すると、われわれは、ふたつの要件があったことに気がつく。つまり、ひとつはあふれ出てくる記憶心象を制御するということであり、もうひとつは制御された記憶心象が凝縮され、ひとつの心象になるということである。第一の要件をまず再確認しておこう。

われわれは、「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」において、知覚心象の成立を、輪郭にあわせて凹凸をつけられた地塗りだけのキャンバス、つまり知覚対象となりうるものに、薄く溶かれた絵の具、つまり記憶心象がふきつけられるのに譬えた[36]。それは記憶心象の現実化の過程において、ある制御が働いているということをも意味していた。

われわれは「原則的に、現在は過去を排除する。しかし他方で、過去のイマージュの排除はまさに現在の態度による抑制によるのだから、そのかたちがこの現在の態度に枠取られうるようなイマージュは、他のイマージュほど大きな障害には出会わないだろう。それゆえもし、過去のイマージュのうち、どれかがこの障害を突破できるとすれば、

それは現在の知覚に類似しているイマージュだ」[37]という引用から、あふれ出てくる記憶に対するこの制御を、まさに現在の知覚との類似性とも考えたのであった。現在の知覚を成立させる要件が〝現在の知覚〟との類似性であるというと、それは同語反復に陥ることになるので、「対象と同一であるかあるいは類似のイマージュを、そして、その輪郭にあわせて作られにやってくるイマージュを外へと投げ出すことが前提となっているのだ」[38]、「判明な知覚は、一方で求心的で外部の対象からくるもの、他方で遠心的でわれわれのいうところの〝純粋記憶〟を出発点とする逆方向のふたつの流れによって引き起こされるのではないのか。……このふたつの流れは結びつけられ、それらが合流する点において、判明な、再認された知覚をかたちづくるのである」[39]というふたつの引用も繰り返しておき、〝対象との類似性〟といういい方で、この制御を理解しておくことにしよう。

判明な知覚の成立も類似性を根拠にしている。このことは、ベルクソンが概念的把握を批判するときの類似性というのと同じことにはならないであろうか。

たしかに『笑い』のなかでは、ベルクソンは子山羊と子羊を前にした狼の例を出して「狼にとっては、同じようなふたつの餌食が、同じようにつかまえやすそうであり、同じように貪るのによいようにあるということだ」[40]といい、さらに「けっきょく、一言でいえば、われわれはものそのものをみていないのだ。われわれは、たいていの場合、ものごとに糊で張りつけられているレッテルを読むにとどめているだけなのだ。この傾向は、必要から生じて、言語の作用によって、なお強調されたのだ」[41]と続けて、類似によってものごとを把握するという性向を言語的把握、概念的把握へと直線的につなげている。ベルクソンは狼に言語的な把握、概念的把握を可能とする能力、悟性もしくは知性を認めないはずであり[42]、知性的ならざる認識と、きわめて知性的なわれわれの認識とのあいだには認識のありようの根源的差異があるように思われるというのに、ここでは、そのことにはとくに触れられずに、類似性のひとことによって、このふたつの認識のレベルが断絶を持たずに語られているのだ。とすると、概念的把握がそれゆえ批判されるであろう類似性は、概念的把握に固有の特性ではないということにはならないだろうか。しかし、そうなのだろうか。そうであれば、そもそもベルクソンの概念的認識に対

する批判は成り立たなくなるのではないのか。

ふたたび『物質と記憶』に戻ってみると、われわれはつぎのような文章に出会うことになる。「ところで欲求は、類似あるいは性質へと一直線に進んでゆくのであって、個々の差異などは気にかけない。一般的にいって、有益なものを識別するということに、動物の知覚は限られているはずだ。草食動物を引きつけるのは草一般である。力として感じられ、受ける色や匂いだけがその外的知覚の直接的所与である。この一般性あるいは類似というこの基盤の上に、その記憶力は、そこに差異化が生ずるであろう対照を引きたてることができるだろう。そのとき、動物は、ある風景を他の風景から、ある範囲を他の範囲から区別するだろう。けれども、繰り返しいうが、これは知覚にとって余計なものであって、必要なものではないのだ[43]」、あるいは「この類似は客観的に力として働くのであり、一致した同じ結果は、根源的には同一の原因の結果として起こるのだと主張する、まったく物理的な法則によって、同様の反作用を引き起こすのである。塩酸が、石灰の炭酸塩に対して、いつも同じように働くからといって、……酸はそれらの種のあいだに類の特徴を見分けているなどというだろうか[44]」。

ここでわれわれが着目すべきことはつぎの二点だ。ひとつは、類似をもってものごとを認識するということは、けっして概念的把握、言語的把握にのみみられる特性ではない、それは、われわれの認識の在り方に由来するというよりも、むしろ客観的な作用として、われわれに働きかけるものだという点である。つまり、この作用は、概念的な把握や、あるいは画家のような知覚に先だって生ずるということである。「われわれがはじめるのは、個体の知覚からも類の概念からでもはなく、中間的な認識、つまり〝しるしづけられた質〟の、あるいは類似の漠然とした感じからであるように思われる[45]」の意味するところはまさにそのことだろう。

これに関連して着目すべき第二の点は、そこで働きかける力を〝外的知覚の直接的所与〟といっていることだ。このことは追って検討するが、このような認識をも、われわれは知覚と理解すべきだということである。われわれはすでにベルクソンにおいてこの〝知覚〟がきわめて広義に使われていることを見てきているのだから、これは確認事項にすぎないというべきかもしれない。しかし、ともする

と、われわれは、概念的把握と対比させられる知覚をもって知覚のすべてと考えがちになりそうでもあるから、ここで、このことを再確認しておくこともあながち無意味なことではないだろう。

さて、第一点に戻って、そもそもの問題を検討してみよう。われわれの認識が、概念的把握であれ画家のごとき知覚であれ、それがともに類似に始まるとするならば、ベルクソンが批判することというのは、〝概念的把握に特徴的な類似性〟ではないことにはならないだろうか。われわれは、どこかあやまった道に入り込んでしまったのだろうか。そこで、われわれは、類似についてのベルクソンの言及を検討してみることにしよう。

すると、われわれは「精神がまず抽象するときに、精神が出発する類似は、精神が、意識的に、一般化するとき達する類似ではないからである」[46]といわれていることに気づく。これはいったい、どういうことなのだろうか。この先を見ると以下のように続く。「精神がそこから出発するそれは、感じられ、生きられる類似、お望みなら、自動的に演じられるといってもいいが、そういう類似である。精神が戻ってくるところのそれは、知性的に認知され、思考される類似である。」[47]

つまり、類似にはふたつのレベルがあるといわれているのである。知性的な人間ばかりでなく、たとえば、前出の塩酸であれ、すべての運動体がそれに対して作用をおこないはじめる類似の認識がまずある。まずそこに第一の類似、〝精神が出発する類似〟がある。このときの類似というのは、すべての運動体に対して客観的、物理的に働く作用である。これに対して第二の類似、〝精神が戻ってゆく類似〟がある。そして、この〝精神が戻ってゆく類似〟こそが、知性的な作用によるもの、概念的把握に固有の類似といわれているのであって、ベルクソンが概念的把握を批判するときにいわれる類似なのだろう。このことによって、われわれは概念的把握に対する批判の根拠をなお類似性――ただし、いまみたように限定された意味での類似性――に、みることができることになるだろう。

しかし、まだ問題は残る。この〝精神が戻ってゆく類似〟とはいったいどういうことなのだろうか。それがまた、いったいなぜ批判されることになるのだろうか。

そこで、われわれは、まず、知性あるいは悟性の働きが〝精神が戻ってゆく類似〟へと向かうという、まさにその

ことをもう少し検討してみることにしよう。この〝精神が戻ってゆく類似〟の特性が際だてば、ベルクソンがそのなにを批判しようとしているのかが明らかになり、またその批判を通じて、むしろベルクソンが積極的に評価しようとしたこともおのずから明らかになるだろう。

ベルクソンは「類についての完全な概念というものは、おそらく人間の思考に固有のものだろう」[48]と述べ、そのうえで、この類概念成立の過程を「この一般性の観念は、その起源においては、状況の多様性における態度の同一性についてのわれわれの意識にすぎなかった。それこそが習慣そのもの、運動の領域から思考の領域へと遡ってゆく習慣そのものであった。しかし、かくして習慣によって機械的に概略を示された類から、われわれは出発して、この操作そのものに支えられてなされる反省の努力によって、〝類についての一般観念〟へと移ったのである。そして、ひとたびこの観念が構築されてしまえば、こんどは意図的に、無数の一般的な諸観念をわれわれは構築するようになったのだ」[49]と説明する。人間は、当初、類似を見抜く漠然とした能力をもって、類似の再認に臨むのだが、実際の再認をおこなってその能力を片づけてみると、その能力は類の概念によって類似を見抜く能力に転じてしまっている。もちろん、それは一度きりの再認によってなされるのではなく、習慣化され、あるいは反省の努力を経てということにはなるのだが、その詳細には立ち入らずに大きな枠組みとしてみれば、〝精神が戻ってゆく類似〟の〝戻ってゆく〟というのは、そのような意味だろう。ベルクソンが脳を中央電話局に譬えるのに乗じて譬えれば、火事場に手こぎポンプを抱え、自分たちの足で駆けていった消防士たちが、帰りには消防車に乗って帰ってくるとでもいうようなものだ。[50]

ひとたび消防車を獲得した消防士たちは、つぎの出動には、当然のように消防車に乗ってゆくであろう。ベルクソンは先の引用に続けて「自然の働きを模倣する悟性は、それ自身でもまた、無数の個別的対象に対し、有限な数での反応をなすために、こんどは人為的な運動器官を備えつけたのだ。これらの機構の総体が、有節言語である」[51]という。ここでいわれていることは、このようにして〝精神が出発する類似〟から〝精神が戻ってゆく類似〟への推移がひとたびなされてしまうと、ちょうど運動器官がそうであるように、あるいは消防車を獲得した消防士がそうである

ように、この後者の類似を機械的に機能させはじめるということである。つまり、ひとたびこのような〝精神が戻ってゆく類似〟ができてしまえば、そのつどそのつどに、〝精神が出発する類似〟に戻ってそこからこの過程を繰り返すというのではなく、既存の〝精神が戻ってゆく類似〟、概念の運用によってことをすませてしまうということなのだ。まさにこのことが、『笑い』においては「けっきょく、一言でいえば、われわれはものそのものをみていないのだ。われわれは、たいていの場合、ものごとに糊で張りつけられているレッテルを読むにとどめているだけなのだ[52]」と、また『変化の知覚』においては「われわれは対象をほとんどみていないのです、われわれは、ただそれがどんな範疇に属するのかさえしればじゅうぶんなのです[53]」と批判されるところなのであって、このような再認の仕方こそが、まさに〝画家の知覚〟と対比されるところなのだろう。

このことを踏まえて、もう一度ベルクソンにおける類似の概念を整理しておこう。いま、われわれは類似のふたつのレベルを確認した。それは、なにかわからないもののすべての運動に働く力としての漠然とした類似・〝精神が出発する類似〟と、悟性が構築した概念としての類似・〝精神が戻ってくる類似〟のふたつであった。類似とはなにかとなにかが類似しているということにほかならず、再認においてはその一方の項に、まさに現前している対象があるということはいうまでもないだろう。そして、それに等号をはさんで対置される項が、この二者において異なっている。つまり一方の〝精神が出発する類似〟においては、まだ判然としないなにかであり、他方の〝精神が戻ってくる類似〟においては悟性の力によって構築された概念であるということが、ここでいわれていることでもあるだろう。ここでは現前する対象に対する項の内容の相違がいわれているのであって、類似による認識という構造そのものが異なっているというわけではない。悟性的認識の場合のことはわかった。では、われわれが明らかにしたい知覚の場合はどうなのだろうか。〝精神が出発する類似〟と同様、現前する対象に対置させられる項が、なにか漠然としたものなのだというところに悟性的認識との差異があるのか。それとも、悟性的認識と、そもそもの構造自体が違うのか。

われわれは繰り返し知覚心象の成立、つまり意識的な知覚、再認としての知覚が、類似の記憶心象のたち現われに

よるものであることをみてきた。ここでたち現われる記憶心象は、われわれが〝つぎつぎと吹きかけられる〟と形容したように、ただひとつのものではないだろう。しかし、認識の構造としては、現前する対象と、われわれのうちにあるなにがしかのものとの類似ということにはかわりはないわけであるから、構造そのものは、概念的把握の場合と同じであるということができるだろう。とすると、問題はなにか。

問題は、やはりこの現前する対象に対置させられる項の特性、つまり、その内容のいかんに、まずはあるといえるのではないだろうか。概念的把握においては、〝精神が出発する類似〟に戻ってそこからこの過程を繰り返すということがない。すでに形作られた〝精神が戻ってくる類似〟、〝概念〟という枠組みがあるだけであり、その内容、内実は省かれているのだといっていいだろう。それに対し、われわれがみてきた知覚の成立は、まさに類似の記憶心象のつぎからつぎへの吹きかけにあるのであり、それが現前する対象に対比される類似の項をつくっているといえるだろう。すなわち、この項は内実の濃いものとなっているといえるのではないだろうか。われわれは、ここで、知覚の成立の要件の第二の点として示した意識の平面の凝縮ということを思い出しておこう。純粋記憶の平面から、現実化に向けて進むにつれ、意識の平面は点へと凝縮されてゆく。このとき、純粋記憶にもっとも近いところにあった平面が有していたあまたの記憶心象は、その多くがそのまま捨て去られることなく、この点に近い極小の平面の上へと凝縮されてゆく。われわれは、そういういきさつを、前章から本章前半にかけてみたのであった。

現前する対象にとって類似の項として、すでに構築された枠組みがおかれるのか、そのつど類似をめぐって精神がおこなう過程を辿り、それゆえ内実をともなったものがおかれるのか——それが概念的把握と、われわれが明らかにしてゆこうとする知覚との差異であるということができるのではないだろうか。ここに差異がある。差異はわかった。しかしまだ、われわれの検討はじゅうぶんではないように思われる。なぜなら、われわれは〝類似の漠然とした感じ〟と概念的把握、それにわれわれが求める知覚の三項を区分し、まず前者ふたつを、〝精神が出発する類似〟と〝精神が戻ってくる類似〟との比較から区分し、ついで後者ふたつをその内実の問題から対比させたのであるが、し

かしまだ、われわれの求める知覚と〝類似の漠然とした感じ〟との関係が問われていないままであるからである。まずはこの問題から検討を続けてみることにしよう。

3　余剰の知覚と生命体の効率的な維持

われわれは、概念的把握が〝類似の漠然とした感じ〟から出発することをみた。この〝類似の漠然とした感じ〟と概念的把握における類似は、等しく類似ではあるけれども、しかし一方は〝精神の出発する類似〟であり、他方は〝精神が戻ってくる類似〟であって、レベルの違うものであった。その限りで、この〝類似の漠然とした感じ〟と概念的把握における類似、類についての概念とのあいだには距離がある。

しかし知覚の場合はどうなのだろうか。この〝類似の漠然とした感じ〟こそが知覚なのか。すでに「力として感じられ、受ける色や匂いだけがその外的知覚の直接的所与である」[54]にみたように、われわれがこのような力を受けている状態を、直接的所与の与えられている外的〝知覚〟であるということはできるだろう。ではしかし、それが、われわれの辿ってきた〝意識的知覚〟――あるいは〝われわれの知覚〟と称したもの――そのものであり、あるいは、われわれが明らかにしようとしている知覚、〝画家の知覚〟なのだろうか。おそらくそれはちがう。

この〝類似の漠然とした感じ〟について、ベルクソンは「われわれがはじめるのは、個体の知覚からでも類の概念からでもなく、中間的な認識、つまり〝しるしづけられた質〟の、あるいは類似の漠然とした感じからであるように思われる。この感じは、完全に理解された一般性からも、またはっきりと知覚された個別性からも同じように遠く、それら一般性と個別性のおのおのを分離分解によって引き起こすのだ。反省的な分析がこの感じを一般観念へと純化し、区別分離する記憶がそれを個の知覚にまで固定するのである」[55]といっていたのであった。〝類似の漠然とした感じ〟を受けるという外的知覚のほかに、さらに個別性を認識する知覚があるといっているのだ。そしておそらく、この知覚、個の知覚こそがわれわれの明らかにしようとする知覚なのだろう。

ふたたび『笑い』をみてみることにしよう。「われわれが個別性を（ある人物を他の人物から区別するときのように）

記すようなときにでも、われわれの目が捉えるのは個別性そのものではない、つまりかたちや色のまったくもってオリジナルなある種の調和なのではなくて、そうではなくて、ただ、実践的な再認を容易にするであるようなひとつかふたつの特色にすぎないのだ。[56]」ベルクソンの批判はここにあるのだから、個別性をみるということがまさに求められる知覚、ものそのものを捉える知覚、〝画家の知覚〟――以下、〝勝義の知覚〟と呼ぼう。なぜならば、それはたんに画家に備わっている能力というばかりではなく、われわれが求めてゆくべき知覚の能力であると思われるからだ――なのだ。図式化すれば、この〝類似の漠然とした感じ〟たる〝知覚〟から、一方に概念的把握が、他方に勝義の知覚が派生してゆくということになる。

しかし、このふたつの派生、概念的把握と勝義の知覚というふたつの認識のありようは、まったく別のものを目指した、まったく別の営みなのだろうか。なぜ一方で概念的把握を目指す認識がなされ、他方で個の知覚という認識がなされるようになるのか。個別性を目指すとは、どういうことなのであり、それはなんのためになるのだろうか。なぜ個的な再認、個的な知覚が成立しうるのだろうか。出発点と方法が類似性に規定されているならば、個別性が成立する余地、根拠は、むしろこの認識が目指してゆくところにあるというべきだろう。その根拠を明らかにするために、まず、おなじく出発点と方法が類似性に規定されている概念的把握の目指すところをみることにしよう。その対比から、個的な知覚の目指すところがみえてくるに違いないからである。なぜ〝類似の漠然とした感じ〟のままにとどまらず、反省的な努力をしてまでわれわれは概念的把握へと向かうのだろうか。

それはいうまでもなく、われわれみずからの生命体を効率よく維持するためにほかならない。自然は、生命が存続してゆくためのふたつのすぐれた能力をそれぞれに発展させた。「動物界のすべての進化は、植物的生へと後退したものを捨象すれば、その一方は本能へ、他方は知性へと進むふたつの分岐した道において達成された[57]」のであり、「本能と知性は、それゆえ、ただひとつの、そして同じ問題の、ふたつの分岐した、しかしひとしく鮮やかな解決を表わしている[58]」。このただひとつの同じ問題とは、まさに生命を維持発展させることであって、本能にもっとも優れているのが膜肢類であり、知性に優れているのがまさにわ

れわれである。知性の能力に典型的なことは、ものごとを反復可能な単位に分割し、その組み合わせによって認識するということだ。われわれは過去のできごとも、現在のできごとも、この反復可能な単位の組み合わせとして理解することができるが、同時に、そのことによって未来についても、この反復可能な単位のなにがしかの組み合わせとしてあるはずであるとして未来をも予測しうるのである。未来を予測しうるなら、われわれはそれに対する適切な構えをとることができ、それゆえ、われわれは効率よくみずからの生命を維持することができる。この未来の予測が可能になるのも、あくまでもものごとを反復可能なものとみなせればこそであるが、われわれには、それができる。われわれは、ある対象を認識するにあたって、その対象が他の対象と共有しているように思われる類似性だけを即座に抽出できるのである。われわれはこの類似性をのみ抽出しうるから効率よく生きられるのだが、さらに効率をあげるためには、この類似性を純化させることがもっとも効果的だろう。そのように純化されたものが、まさに「ただそれがどんな範疇に属するのかさえしればじゅうぶんなのです」[59]といわれるときの範疇 catégorie なのであり、「われわれは、たいていの場合、ものごとに糊で張りつけられているレッテルを読むにとどめているだけなのだ」[60]といわれるときのレッテルであり、ものごとの概念であり、本質と思われる部分なのである。いうまでもなく、本質とはまさにそのものの個別性を捨象した、類似のものごとに共通する、もっとも純化された類似性にほかならない。

そのような本質、概念をもってものごとを把握するように習慣づけること、その努力がまさにわれわれのなす反省的努力なのだろう。われわれが反省的努力をもって類似性を純化し、一般的観念、諸概念にまでいたり、そのように純化された類似性によってものごとを把握するということは、〝ものごとそのものをみていない〟という批判にもかかわらず、まさに生命の根本的要求に応えるためにほかならない。

もちろん、このような概念的把握、悟性的認識は、受けた作用に対して即座に反作用を返すことを猶予された意識的状況においてこそ成立するのであるが、われわれがぜひともおさえておかなくてはならないことは、この認識がただちの反作用を引き起こすものではないにせよ、未来に生じうる行動の可能性に深く結びついているということであ

る。われわれは未来にわたって、みずからの生命を維持してゆかなくてはならない。だからその意味で、この悟性的認識、未来を予測する認識は将来に向かっての行動の可能性を広げ、その選択肢を多様にすることによって、生命維持に貢献するものなのである。くどいように繰り返せば、われわれの悟性的認識は、われわれの未来の行動に関わっているのである。

われわれが認識をはじめる〝類似の漠然とした感じ〟は広義の意味での知覚であった。ここからはじまり、行動の能力に結びつけられ、未来の行動に向かうのが悟性的認識、類似をのみ求める認識なのである。行動の能力に結びついた認識の能力は、必要最低限の類似の判定さえすればよいのであって、類似性の認識のみが、認識としてはたどり着くべき終点であり、類似さえ認識されれば、もはや認識そのものは問題ではなくなる。ここから先は認識の問題ではなくて行動の問題になってくるのだ。このような行動に結びついた認識にあっては、それを越え出た認識は余計なものであり、むしろ生命維持の効率化を妨げるものである。ところが、まさにそのような余計なもの、余剰の知覚ともいわれるものがある。「これは知覚にとって余計なものであって、必要なものではないのだ」[61]――ベルクソンはそういうのである。その知覚とはなにか。それがまさに本論の冒頭にも掲げた引用、つまり〝自然がその知覚の能力を行動の能力に結びつけ忘れた〟[62]といって、この悟性的認識と対比的に述べられる〝画家の知覚〟なのである。行動にとって余剰なものであり、終点も目的も持たずにただ認識を深めてゆくということ、それが個的な知覚、勝義の知覚なのだ。

類似を見いだすことは行動や生命維持、あるいはそれらの効率化には不可欠なことだが、しかし、もしこれらのことを目的としない認識があるとすれば、それはもはや類似そのものを問題とはせず、類似に執着する必要もなくなるだろう。類似性に発し、類似性を用いながらも、類似性を目的としないことになるから、だから、それの向かう先は類似性ならざるものたりうる可能性があることになるだろう。ベルクソンはそれを定かには語らないが、おそらくそれが個の認識なのであり、勝義の知覚であるといえるのではないだろうか。類似性そのものは問題ではなくなりながら、しかし認識は続く。たどり着くべき終点を持たないから、この営みは、ほかになにがしかそれを妨げることが生

じない限りなされ続けるだろう。われわれはここで、「かくして、われわれは絶え間なく創造し再構成する。われわれの判明な知覚は、まさに閉じた円環に似通っていて、そこでは精神へと導かれる知覚心象と、空間へと投げ出される記憶心象とが、追いつ追われつして走る」[63]という知覚↑↓記憶の循環運動を思い出しておくことにしよう。〝追いつ追われつして走る〟という、まさにその果てしない循環運動のみがここにあることになるのである。

悟性的認識と勝義の知覚の差異は、現前する対象に対置させられる類似の項の内実ばかり問題ではなく、その営みが、なにがしかつぎの営みに移るための一プロセスにすぎないのか、つぎに移るべきプロセスをもたずして、それゆえどこまでも継続してゆくのかという違いでもあるということができるだろう。〝画家の知覚〟、個の知覚、勝義の知覚は目的を持たない。われわれが生命体としてみずからを維持保存させてゆくという生の究極的な要求を、その目的として持たないのが、まさにわれわれの求める勝義の知覚なのである。本論2でも引用してきたつぎの箇所を、もう一度、引用しておこう。

「ところで欲求は、類似あるいは性質へと一直線に進んでゆくのであって、個々の差異などは気にかけない。一般的にいって、有益なものを識別するということに、動物の知覚は限られているはずだ。草食動物を引きつけるのは草一般である。力として感じられ、受ける色や匂いだけがその外的知覚の直接的所与である。この一般性あるいは類似というこの基盤の上に、その記憶力は、そこに差異化が生ずるであろう対照を引きたてることができるだろう。そのとき、動物は、ある風景を他の風景から、ある範囲を他の範囲から区別するだろう。けれども、繰り返しいうが、これは知覚にとって余計なものであって、必要なものではないのだ。[64]」

勝義の知覚は、〝類似の漠然とした感じ〟から出発し、さらに進んでゆくものなのだが、もはや類似性を問題とせず、概念的把握がそれを目的としていた運動能力ともかかわらず、いわば自己目的的に、どこまでも継続する循環運動としてある。内実は濃いが、しかし、生命維持の目的からははずれてゆくのが、この勝義の知覚だ。われわれが結論しようとする勝義の知覚とはそういうものだといえるだろう。

しかし、これでこの知覚をすべて語りつくしたことにな

るのだろうか。いやまだ、大きな問題が、なお曖昧なままに残っているように思われるのだ。この問題は、おそらく容易には語りえないことであるだろう。われわれはそれを明らかにする別の機会を期待しつつ、そのおおまかな見取図をさし示し、本論を閉じることにしようと思う。

4　勝義の知覚と生の本質

われわれが辿ってきた道を「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」における検討から、もう一度振り返ってみれば、まず、われわれはベルクソンに倣って純粋知覚の平面というものを想定することからはじめたのであった。そしてこの純粋知覚の平面に滞りが生じ、記憶が介入することによって、そこに事実上の知覚のはじまりをみた。純粋知覚からわれわれの求める知覚、事実上の知覚を区分したのは、記憶力の介入の有無であり、行動の留保の有無であった。それは意識の有無といいかえてもよいものであって、それゆえ、この事実上の知覚は意識的な知覚ともいわれたはずである。この事実上の知覚から出発し、概念的把握と区分されつつ現われ出てくるのが、われわれが求める知覚、勝義の知覚――それは画家にもっとも典型的に備わっている知覚である――であった。[65] このようにして、われわれは純粋知覚という最広義の知覚から、徐々に限定を加えつつ、そしてその都度生ずる他の概念との整合性をつけつつ、勝義の知覚を紡ぎ出していったのであった。

そしてわれわれがこの勝義の知覚にみた特性は、いわば自己目的的であり、生命維持という生命体に課せられた目的からは遊離し、むしろ生命にとって余計なもの、余剰のものであるということであった。われわれは、繰り返し引用した『変化の知覚』のなかの〝自然が運動能力と結びつけ忘れた〟という〝画家の知覚〟、勝義の知覚の特性に、このようにしてたどり着くことができたのである。けれども、われわれはそれを確認できれば、それで、じゅうぶんなのであろうか。

そもそもこの余剰の知覚というもの、運動能力と結びつけ忘れられた知覚の能力というものが、われわれが求め、回復すべき知覚であると考えることと、ベルクソンの思想全体との整合性はどうなのかというと、どうもなお疑問が残るように思われるのだ。

ベルクソンはこの勝義の知覚を積極的に評価している。おそらくこのような知覚こそ、ベルクソンの究極の目的であるところの直観へとわれわれを導くものとして、評価されるはずだ。そしておそらく、ベルクソンのいう直観とは、宇宙の根源的な生を把握するということ、それも、外から見て取るということではなく、まさにそれと一体になってそれを捉えるということであるだろう。しかし、同時に、彼はそのような生は、われわれのこの現実の生と切り離されてある、われわれの生からはなれた〝彼の地〟にあるというのではないとも考えていた[66]はずである。つまり、われわれがこの現実の生を生きるということと、根源的な生を生きるということは、完全に一致しないまでも、同じひとつの脈絡のなかで語られてしかるべきだと思われるのだ。

しかし、ここで積極的に語られる勝義の知覚は、行動の能力から切り離され、それ自体として循環し続ける知覚、現実の生にいささかも貢献しないかのごときものとして語られているということになる。これは矛盾ではないのだろうか。

この矛盾に対して、つぎのようにいうこともできるだろう。たしかに、この勝義の知覚は、いささかも現実の生に貢献しないようにみえるかもしれない、けれども、そのときつぎつぎとたち現われ、照射される記憶心象は、まさにそれまでわれわれが、より好ましい生を求め、われわれが快適に生きるために選択した、そのつどの知覚心象にほかならないのだから、いまここに生ずる知覚心象はそのような生の快適さに裏うちされているものであり、だから、一見、自身の生になんの利することもなく、ただものそのものをみているだけのように思われても、その実、生にとって快適なるものを求めているのであって、その意味で生に貢献はしているのだ、と。たしかにそのようにもいえるかもしれない。ちょうど、われわれの悟性的認識が、現実には即座の作用・反作用に関わっているものではないにもかかわらず、勝義の知覚との対比においては行動の能力に関わるとされたように、勝義の知覚も、絶対的に現実の行動と関わらないというのではなくて、相対的にその関係に距離があるという、ただそれだけのことなのだということも可能であるようには思われる。事実、「運動へと展開しない知覚はない[67]」ともいわれ、この反論を否定しようとは思わない。

けれども、どうもそれだけではないように思われてならないのだ。

前述のとおり、われわれは、この勝義の知覚を明らかにするのに、『物質と記憶』の流れにほぼ沿いながら、まず純粋知覚が設定され、運動の平面が理解され、そこに運動の滞りが生じ、作用に転じなかったイマージュが記憶心象として保管され……という脈絡を辿ってきたのだった。しかし、そもそも、この純粋知覚がどのように、そしてなにゆえ設定されたのかを尋ねてみれば、それは、われわれが——ものごとの通常の把握、認識にすっかりなれてしまっているわれわれが——、つねに生成変化し、うごめく捉えどころのない記憶の前進、うねりを、いっきに捉え難いことに配慮して、それゆえ〝理論上〟設定されたのではなかったのか。純粋知覚は〝事実上〟ありえないのではなかったのか。純粋知覚同様、あるいは単なる作用・反作用の運動平面も、また事実上は存在しないと考えるべきなのではないのか。われわれはまずそのような平面を想定し、そこに滞りが生ずると考えた。そうなのではなくて、事実上は〝滞りが生ずる〟のではないのではないのか。いや、〝滞り〟と否定的な色合いをこめて呼ばれるものそのものが、まさに積極的に評価されるもの、すべてに先だってあるものなのではないのか。

われわれは、この勝義の知覚の根拠を、この滞りに根拠を持つ記憶心象にみ、さらに現実的な生に対して、いわばそれからはずれ、現実の生にとっては非効率なもの、余剰のものとして勝義の知覚をみたことになるが、これはつまり、勝義の知覚そのものを滞りと理解していることになるだろう。しかし、この滞りは、実は滞りではない。理論上設定された——あるいは、われわれの通常の認識能力が、あると前提する——ある平面、純粋知覚の平面もしくは作用・反作用の機械的な平面、必然的法則に則った運動のなされる平面からみれば、まさにそれは〝滞り〟と称されるものであるのかもしれないが、しかし、そのように捉えることは、ベルクソンの意図するところからすればまったく逆のことであるのかもしれない。とすると、われわれは、ここまで辿ってきたすべての理解を、ここでひっくり返さなくてはならないのかもしれないのだ。あるいは、このとき、ようやくベルクソンのいう知覚が、あるいは直観が理解されることにもなるのだろうが、その試みはまた、機会を別にすることにしたい。

なお、最後に付言すれば、このようにしてここまでの検討は、おそらくすべてひっくり返されなくてはならないだろうが、しかし、だからといって、ここまでの検討がまったく無意味であったとは思わない。なぜなら、ベルクソンはそのように語ったのだし、われわれが、〝画家の知覚〟を語り出すためには、まずは、今回の検討でみたような理解からはじめなくてはならないと思うからである。

註

なおベルクソンの引用は（Quadrige/PUF 頃の略号・ページ）／（PUF 全集頃のページ）として表記し、テクスト及び略号は以下による。講演であるところの『変化の知覚』は「ですます調」で訳した。

Essai sur les données immédiates de la conscience, Quadrige/PUF, 1927 (3e éd., 1988) = DI

Matière et mémoire, Quadrige/PUF, 1939 (4e éd., 1993) = MM

L'évolution créatrice, Quadrige/PUF, 1941 (156e éd., 1986) = EC

Les deux sources de la morale et la religion, Quadrige/PUF, 1932 (3e éd., 1988) = MR

Le rire, Quadrige/PUF, 1900 (401e éd., 1985) = R

La pensée et le mouvant, Quadrige/PUF, 1934 (93e éd., 1987) = PM

ŒUVRES, PUF, 1959 (5e éd., 1991)

（1） 〝画家の知覚〟というのはベルクソンの術語ではけっしてない。これは本文で述べたように、この論文に先だって書かれた論文において、われわれの知覚一般について論ずるにあたり、それを〝われわれの知覚〟と称したのと対比させるためだけのことである。なお、本論後半においては、われわれが目指すべき知覚という意味合いを込め、〝画家の知覚〟を〝勝義の知覚〟とも呼ぶことにした。

（2） PM 152/1373

（3） 『成城文藝』第一六三号、成城大学文芸学部、一九九八

（4） PM 150/1371　ターナーやコローの絵をみるとき、われわれは「本当だ」と思うことがあるとベルクソンはいい、その根拠を問題にしてゆく。

（5） 宮川「味覚的芸術の可能性――美学的試論――」（『成城文藝』第一五六号、一九九六、成城大学文芸学部）において、若干の考察を試みた。

（6） MM 32/185

（7） MM 25/188

(8) MM 157/283
(9) MM 195/313
(10) MM 12/170
(11) MM 172/296　ほかにも、DI 126/111 などにみることができる。
(12) MM 170/294
(13) MM 170/294
(14) 宮川「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」(前出) 2章参照
(15) MM 258/360
(16) MM 260/362
(17) MM 25/188
(18) 後述するように、しかし、根源的には同じ究極的な目的を有すると考えるべきだろう。そして、その究極の目的——それはまさに〝生きる〟ということにほかなるまい。たとえ、思弁的な意識が行動に結びつかないように見えたとしても——から、逆に辿れば、〝同じひとつの〟意識の、異なったアスペクトにすぎないというべきだろう。
(19) 宮川「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」(前出) 1-1参照
(20) このように整合性をつけることには、若干の不安は残る。というのも、結論部でみるようにおそらくベルクソンは、われわれの認識の根底からの変更を要求しているだろうからである。

純粋知覚の平面上に滞りが生ずることで意識的な知覚心象が生じ、それがすなわち記憶であり……とわれわれはみてきた(「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」参照)。この純粋知覚の平面には、そもそも滞りがない。滞りとは不確定性であり選択の可能性であった。そして、この選択の余地も、記憶・持続の厚みもない純粋知覚の平面に、「まったくもって純粋な現在のなかで生きるということ、刺激から引き続く直接的な反作用によって刺激に反応する」〝意識ある自動人形〟が位置するなら、選択の余地がない以上、意識もないとも考えられ、われわれはそれが問題だと考えたのだ。

しかし、そもそも純粋知覚の平面があらかじめあるというのではまったくないのだ。そのように語りはじめるしか、われわれには理解できないから、だから、純粋知覚から語りはじめられたのだ。しかし、そのようなものはない。あるのは、つねに生成変化する持続、記憶のたえざる前進、つまりは生のうねりのみなのである。この生のうねりは、不確定性に、反作用の留保から生ずる選択の自由に

根拠を持つ。あるいはまさにそのようなものこそが、まさに生のうねりであり、すべてに先だって、それがあるのである。つまり、このことは、すべてにおいて意識がたち現われ続けていることを意味していないだろうか。

とすれば、意識のないところに意識が生ずるのでもなく、恒常的に意識がないという状態があるというのでもないことにはならないだろうか。しかし、本論ではその検討に入る余裕はない。

(21) MM 12/170 「ある記憶が意識に再び姿を見せるためには、その記憶は純粋記憶という高きところ hauteurs de la mémoire pure から、〝行動〟が達成されるまさにその点まで降りて来なくてはならない」(MM 170/293 傍点引用者)という言い回しも、この図式が〝逆〟円錐なので、底辺がもっとも上面になるからなのだろう。

(22) MM 181/302 われわれが「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」(前出)における渦巻きの比喩で用いた図式(1-2、註27)の中央のものがそれである。

(23) MM 142/272

(24) MM 268/368

(25) MM 185/305

(26) MM 156-7/283 なお、ここでわれわれが注目しておきたいのは、あくまでも「存在の同義語ではない」という箇所である。直後の「現実的行動うんぬん」については、ここで意識が行動するものの特徴であったらという限定がついていることに留意しておく。つまり、すでに自動人形にみたとおり、われわれが明らかにしたいのは現実的運動に関わりながら、しかし、それが保留されている場合のそれだからである。

(27) MM 156-7/283

(28) MM 12/170

(29) もちろん、後述するように、内容がまったく減じないというのではないだろう。

(30) MM 268/368

(31) MM 185/305

(32) MM 142/272

(33) PM 152/1373

(34) このような概念的把握、それは知性に由来するものであるが、この概念的把握あるいは知性について、ベルクソンは一方的に批判ばかりをするのではない。これに関しては、宮川「味覚的芸術の可能性——美学的試論」(前出)の註3参照。

(35) R 116/459

(36) 宮川「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」(前出) 2-2参照
(37) MM 103-4/241-2
(38) MM 112/248
(39) MM 142/272
(40) R 116/460
(41) R 117/460
(42) 知性とはできごと、ものごとを反復可能な単位に分割、抽象し、そのことによって未来を予測する能力でもある。動物が知性を有していないことを、たとえば「動物は自分が死ぬことを知らない」(MR 135/1085) などといって示している。
(43) MM 176-7/299
(44) MM 177/299
(45) MM 176/298
(46) MM 178/300
(47) MM 179/300
(48) MM 176/298
(49) MM 179/301
(50) MM 26/180 宮川「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」(前出) 2-1参照
(51) MM179/301
(52) R 117/460
(53) PM 152/1373
(54) MM 177/299
(55) MM 176/298-9
(56) R 116-7/460
(57) EC 135/609
(58) EC 144/616
(59) PM 152/1373
(60) R 117/460
(61) MM 177/299 〝知覚〟のふたつのレベルに注意したい。
(62) PM 152/1373
(63) MM 113/249 宮川「ベルクソンにおける〝われわれの知覚〟について」(前出) 2-3参照
(64) MM 176-7/299
(65) 多少、恣意的に解釈している。ここでは、概念的把握も広義の知覚にはじまるという立場をとっている。というのも、画家が差し出した〝画家の知覚〟をみたときにわれわれが「そうだ、それは真実だ」といいうるためには、概念的把握に終始しているわれわれもが同時に〝画家の知覚〟と共通のなにがしかの知覚をしていないとならないと考え

られるからだ。『変化の知覚』のなかでも、ベルクソンはわれわれはそのようなものを知覚しているのに、無視しているだけだ（PM 152/1372-3）という。だから、概念的把握と勝義の知覚のあいだには、なにがしか共通のものがなくてはならない。それをここでは〝広義の知覚〟と考えたい。

この構造は〝類似の漠然とした感じ〟から概念的把握と個別の知覚がそれぞれ生ずるということ、この〝類似の漠然とした感じ〟が外的知覚ともいわれていることに根拠を持つのだが、なお問題も残る。というのは、事実上の知覚が行動の留保を要件としているにもかかわらず、この知覚は、酸がそうであったように、必ずしも作用・反作用の必然的運動から逃れえていない場合も含まれるからである。ただ、この問題も、こののちに論ずる論旨のひっくり返しによって解決するのかもしれないが、本論ではそこまでは考察しない。

(66) 『変化の知覚』のなかで、彼はプロティノスをつぎのように批判する。「しかし、おわかりのように〝（一者のもとに）逃げる〟のが、問題なんです Mais, comme vous le voyez, il s'agissait《fuir》」（PM 153/1374（ ）内引用者）。前出「ベルクソンの知覚・〝われわれの知覚〟について」1-2の註でみたように、ベルクソンの思想の全体像を海のうねりに譬えるなら、究極的にはベルクソンは、個々の波、うねりが海全体を動かし、それがまたわれわれ個々の波をつき動かすというような図式であろう。プロティノスは、個々のうねりが海全体を動かすのではなく、なにか根源的な力が海全体を、したがってわれわれ個々の波をも動かすという図式であるともいえるだろう。

(67) MM 101/239-40